

2025年度 目白大学 学位授与式

式 辞

本日ここに目白大学より修士および学士の学位記を授与された皆さん、まことにおめでとうございます。

目白大学の母体である目白学園は、大正12年(1923)5月に創設され、2023年に、創立百周年を迎え、今年103年目を迎えます。ここにいらっしゃる多くの卒業生と共にこの百周年を迎えることができたのは大きな喜びでありました。

ただ、今回学部を卒業される皆さんの多くが入学した時には、2年前からのCOVID-19の感染がまだ完全には活まっておらず、実習ができないなどの制限があつて、大学生活もまだ厳しい状況でありました。

そうした不自由と困難の中で大学生活をスタートさせ、日々努力を重ね、本日ここに卒業の日を迎えられた皆さんに、目白大学の教職員を代表して、敬意を示すとともに、心よりお祝いを申し上げます。また、皆さんの学業を物心の両面から支え、この晴れの日を共に迎えられたご家族の皆様にも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

ここにいる卒業生の多くは2020年に入学されています。その年の春、私も学長となり、初めての入学式で、みなさんの前で式辞を述べたのです。みなさんは入学式と学位授与式で私の式辞を受ける初めての、そして実は最後の卒業生ということになります。入学式の時の私の話を覚えていらっしゃいますか？緊張した中で4年前に聞いたことを覚えていたら素晴らしいですが、その時は本学の建学の精神「主師親」のお話と、そして佐藤重遠先生がどのようにその建学の精神を以てこの学園を創設したかをご説明しました。

そしてその後、自分の夢・希望をいつも頭に入れて、何事も自分の頭で考えてほしいと申し上げました。その時にまだ自分の希望が定まっていな人もつねにそのことを念頭に置いて日々を過ごしてほしいとも申し上げました。インターネットやスマートフォンの画面を見たりして、ただそれに良いとか悪いとか好きとか嫌いとか反応するのではなく、実際に自分の頭で考えてほしいということです。みなさんは4年間はいかがだったでしょうか。それぞれの学科・研究科の学びの中で、日常で表面的に見ていた時にはわからなかったことが学べたのではないかと思います。

また、既に隆盛を極めていたSNSでのやり取りも含めて、他人の評価は気にせず、自分自身の評価を大事にしてほしいということもまず申し上げました。大事なことは他人の評価でないのだから、そこを間違っただけはいけない。自分で納得

することが大事なのだ。

また人間関係を築くことが大事とはいうけれど、それはやみくもに人に合わせるということではなく、意見が違った場合は、その時に何が一番大事なのかということを考えて、感情的にならず冷静に話し合うことが重要だとも申しあげました。実際に講師の先生方から、「目白の学生さんはグループワークが上手ですね」と伺って、誇らしく感じたことが思い起こされます。

みなさんは大学生生活の中で、学科によって違いがありますが、実習や留学を経験されたり、国家試験の勉強をして資格を取ったりと成果をあげる中でさまざまな苦勞もあったと思います。私は自分の評価が大事だとは申しあげましたが、大学の4年間で、自分のことを完璧だと評価できる人など、まずいないと思います。私がみなさんの卒業にあたって、まず申し上げたいことは、自分の評価というのは、大学での学びを基礎として、これからの自分の人生の中で、長い期間で見ても、行っていただきたいということです。そのために生涯にわたって、学ぶという姿勢を忘れないでいただきたいと願っています。私がここで自分自身の話をするのもどうかと思うのですが、私が教育の世界で仕事をするのが今までできたのは、授業の準備をしているうちに、何かではっと気付くことがあり、またひとつ学ぶことができたと思えることがいつもあったからでした。そうしたことが糧になって、仕事を続けることができたと思っています。仕事を始めれば、忙しい日々の中で、大学での学びが遠くなってしまふことがあるかもしれませんが、何が行き詰まったら、大学時代のことを思い出し、学生時代に読んだ本や教科書を開いてみてください。それが何かのヒントになるかもしれませんし、すぐに良い結果が得られなくても、目前の出来不出来に悩みすぎず、自分の人生をトータルで考えながら歩いていっていただきたいと思っています。

今までの試験の勉強や実習での局面などでも、どうしてもこういう場合の正解は何かは気になり、正解を早く知りたい、あるいは教えてほしいということになり勝ちですが、実際には、生きていく上で、Radwimpsというグループの歌にもあるように「正解」と言われるようなものはありません。そんなことは実習やフィールドワークの時に言われたし、わかっていますよ、と言う方もいるかもしれませんが、本当に日常生活では、こういう場合はまずこうしてみる、という原則はあっても、個々の場合は毎回異なるので、これと決まった正解はないのです。

どんな人でも小さなミスや失敗はあります。仕事をしていく上で、常日頃自分の行ったことへの反省は大事ですが、私が言いたいのは、一般的に言って、後からあれは正解でよかったとか、遂にあれは失敗だったかとか、どちらにしても思ひすぎないでほしいということです。

日本人はとにかく正解か不正解か、あるいは成功か失敗か、ということに必要以上にこだわる性質があると思っています。試験をやっているわけでもないのに、

あの人はこのようにしたけれどそれは正解だったとか、いや正解とは言えないなどと言ったりするのは、もしかしたら、日本語の特性で、正解とか不正解とか、成功とか失敗とかをわけるのが好きなのではないかと思うのです。というのも、私はフランス文学を専攻し、そのためにフランス語を学習しましたが、日本語でいう「失敗」をフランス語に訳そうとすると、さまさまの語に訳し分けられて、これという単語になりません。たとえば、入学試験には「成功しなかった」とか「外してしまった」というだけで、失敗という名詞をことさらには使いません。日本語の場合は、何かうまいかかないと、なんでもすぐ失敗と言ってしまって、それが強調されてしまっているように私は感じます。そうすると、スポーツにしても、試合に負けた時に、どこで失敗したのかなどと犯人捜しのようなことになってしまい、そんなことをしていても、結果としては、あまり発展やその後の成長には繋がらなかつたりします。

物事が思い通りに行かなかつたり、自分のしたことがすぐに良い方向に出なかつたとしても、たとえばすぐに自分はだめなんだとか、この仕事に向いていないとか、そんなことは思わずに粘り強く進んで行ってください。自らへの評価は大事で、反省がないのは困りますが、正當に評価すれば良いのであって、それによってネガティブな気持ちになる必要はありません。今日はこれができてないけれど、少しずつやれば良いと大きく考えてください。

また4年前の入学式では、人間関係について、それぞれ意見が異なるのは当たり前だから、感情的にならず、何が一番大事かを冷静に話し合うことが大事と申し上げましたが、みなさんは大学生活の中で、たくさんの先生や職員の方、またたくさんの友達と巡り会ったことでしょう。しかし、一方で、人との関係で悩んだりしたこともあるかもしれません。

人とのつながりということで、私がいつも思い出すのは、サン＝テグジュペリのあの有名な『星の王子さま』の一節です。物語の後半で、王子さまはキツネに出会います。そこで王子さまは、友達になっておくれよ、と頼むと、キツネは飼いならされていらないから、友達にはなれないと答えます。王子さまは話の中で、「飼いならすってどういうこと？」と3度尋ねて、キツネは「よく忘れられていることだけだね、「つながりを作る」ということさ」とようやく答えます。王子さまは、そのためにはどうしたら良いのかと尋ねると、何より忍耐が必要だと言い、時間を掛けていくことが大事だという意味のことをキツネは話して行きます。

人との関係とは不思議なもので、初めから馬が合って、すぐ仲良くなれる場合もありますが、反対になぜか、そりが合わないと感じることも起こります。しかし、そこで『星の王子さま』のキツネの言葉を思い起こしてほしいのです。サン＝テグジュペリは、日本語に訳すと「飼いならす」という独特の表現を使ってい

ますが、それはつまりキツネが説明するとおり「つながりを作る」ことで、そしてそのつながりは、急にはできず時間を掛けて、できていくものだと言っています。古い訳をお読みになった方はそんなこと書いてあったかしらと思われると思いますが、初めて出た翻訳では、そこは「仲良くなる」と訳し変えられてしまっていて、いわゆる直訳をすると「つながりを作る」と書いてあるのです。

なので、これから社会に出て、初めはもしかしてうまく行かないと思った人でも、それで決めつけしないで、時間を掛けて誠実に接していくことで、つながりができていくと考えていただきたいのです。ちょっとした言葉の行き違いなどは気にしすぎないで、付き合うことをしてみてください。サン=テグジュペリも「言葉は間違いのもとだからね」とキツネに言わせています。

サン=テグジュペリは、生涯にわたって飛行機乗りをしながら、作家活動をしていた人で、最後は第二次世界大戦中、地中海での偵察飛行中に命を落としています。『星の王子さま』のほかに『夜間飛行』や、『南方郵便機』、『人間の土地』など、航空路開発とパイロットの話を書いた作品を残しています。それらの作品を注意深く読むと、あからさまに書かれていませんが、その奥には、あくまで厳格で厳しい飛行場長と、命を危険にさらしながら飛ぶパイロットの心の中でのつながりや、さらにはパイロットに犠牲者を出しながらも航空機が安全に飛ぶルートを開いて、後世の人のためになるようにするという、言ってみれば未来へのつながりを読み取ることもできます。

つまり同時代の仲間とのつながりと、過去から現在、そして未来に渡るつながりという、両方のつながりをサン=テグジュペリは大事にしていると私は思っています。私たち教職員は、みなさんと4年間かあるいはそれ以上ともに過ごし、そこにつながりを築いてきたと確信していますが、それはまたこれから社会に羽ばたいていく皆さんの未来に、私たちの気持ちを託したということでもあります。

つながりを作ることに同時に気を付けていただきたいことは、つながりがないと思われる側を排除しないということです。人間にとって「共感」を持つということは、長い間良いことだと見なされてきましたが、最近の研究では、そのことによって、「共感」を持たない側に対して敵対心を持つ可能性を高めるとも言われ、それが争いやいじめのもとになるというのもあるようです。たとえ考え方が違って、お互いに認め合うということもこれからの世の中で大事なことだと思いますので、どうかそのことも忘れないでください。

本学の建学の精神は、みなさんが学んだ教室に掲げてあった「主師親」です。そのうちの「主」は「国家・社会への献身的態度」と現代では解釈されていますが、端的に言えば「社会貢献」ということだと思います。新宿キャンパスでは、正門から入って記念館の入口を過ぎて少し行ったところの右側に、学園の創設

者佐藤重遠先生と、第2代理事長の佐藤フユ先生の銅像があるのは、みなさんもご存じですね。その重遠先生は、後に本学園の第6代理事長となる、息子の佐藤弘毅先生に日頃から「人を助けたことは忘れてよいが、助けられたことは忘れてはいけない」とおっしゃっていたそうです。

つまり、先ほどの話と関連づけて言えば、恩を売るようなことはしてはいけないが、恩を受けたひととのつながりは大事にきなさいと言い換えられるように思います。そして、今の自分があるのは、まわりの人のおかげなのだという謙虚な気持ちを忘れないようにきなさいということだと思います。

実際、貧しい小作農の家の出であるにもかかわらず、さまざまな人の援助を受けて勉学を続け、東京帝国大学を卒業して、三菱合資会社に就職後、衆議院議員を務め、さらに本学園を設立した佐藤重遠先生の言葉ですから、それは直接助けてくれた人に感謝するということはもちろんですが、自分を育ててくれた社会に対して、今度は恩返しの気持ちで貢献するようにきなさい、ということを行っているように思います。

みなさんは、目白大学で学んだことを誇りとし、大学でできたつながりを大事にしながら、これからも自らを磨くために学び、そして自信と勇気を持ち、また創設者佐藤重遠先生がおっしゃる通り、自らが生きていく社会に貢献できるように、ひとりひとりの役割を果たしていただければと存じます。目白大学を卒業されたみなさんが、社会のさまざまな分野で活躍してくださることが私たちの喜びであり、目白大学の教職員は、いつまでもみなさんを応援しています。

これを以て学長の式辞といたします。本日はまことにおめでとうございます。

2026年3月26日

目白大学学長 太原 孝英